

日本史 A、日本史 B

第 1 高等学校教科担当教員の意見・評価

日 本 史 A

1 前 文

今年度の大学入試センター試験（以下「センター試験」という。）は、現教育課程になって9年目の試験である。センター試験全体の受験者数は10,956人（約2.1%）減少し、地理歴史科全体では7,600人（約1.9%）減少した。一方、「日本史A」の受験者数は2,612人で、昨年度に比べて39人（約1.5%）減少した。ちなみに「地理歴史A科目」の受験者数はいずれも減少している。

今年度の「日本史A」本試験の平均点は47.70点で、昨年度より6.06点上昇し、標準偏差は19.68と昨年度より1.72ポイント上昇した。「日本史A」と「日本史B」の平均点（66.32点）較差は18.62点と、昨年度（20.49点）に比べて縮小した。また、B科目間の平均点較差が最大3.36点であるのに対し、A科目間は「地理A」と「日本史A」では4.06点であり、「世界史A」と「日本史A」では0.08点であった。

今年度も「日本史A」の設置の趣旨に沿った良問が多かったと評価できる。今後も高等学校における授業時数や実態に合わせた適切な出題内容、難易度について更なる検討を行い、問題作成上における配慮をお願いしたい。

以下、今年度の問題について(1)~(4)の視点で分析を行った。

- (1) 高等学校学習指導要領（標準2単位）に準拠し、教科書の内容や授業実態に即した形式・難易度・内容の問題であったか。
- (2) 「日本史A」設置の趣旨を生かした「世界史的視野に立った理解」や「歴史的思考力」を評価する問題であったか。
- (3) 項目別・分野別出題範囲のバランスがとれていたか。
- (4) 出題方法や表現などが適切であったか。また、60分の試験問題としてふさわしかったか。

2 試験問題の設問形式・分量・難易度・出題範囲

- (1) 設問形式では（表1）、昨年度と比べ「二つ以上の事項（人名・語句など）の組合せ」の設問が6題（16点）から10題（29点）へ、「古いものから（年代）順に配列」の設問が2題（6点）から5題（15点）へそれぞれ増加した。一方、「正しい文章を選択」の設問が10題（30点）から6題（18点）へ、「二つ以上の文章（正誤）の組合せ」の設問が11題（33点）から9題（26点）へとそれぞれ減少した。昨年度、一昨年度と比べ設問形式のバランスにやや変化がみられるものの、例年どおり多様な形式を用いて受験者の基礎的な学習の達成の程度を判定しようとする配慮がみられる。
- (2) 全体の分量は、大問6題、設問数34題で、昨年度と同様である。また、第3問と第5問の計12題（35点）が「日本史B」との共通問題であった。リード文は、特に難解な用語や表現はな

く、適切な分量であった。

本試験の設問形式（表1）

（ ）内は配点

設問形式	平成26年度	平成25年度	平成24年度
正しい事項（人名・語句など）を選択	0題（0点）	0題（0点）	1題（3点）
誤った事項（人名・語句など）を選択	0題（0点）	0題（0点）	0題（0点）
二つ以上の事項（人名・語句など）の組合せ	10題（29点）	6題（16点）	8題（22点）
正しい文章を選択	6題（18点）	10題（30点）	8題（24点）
誤った文章を選択	4題（12点）	5題（15点）	4題（12点）
二つ以上の文章（正誤）の組合せ	9題（26点）	11題（33点）	8題（24点）
古いものから（年代）順に配列	5題（15点）	2題（6点）	5題（15点）
	34題（100点）	34題（100点）	34題（100点）

本試験の難易度（表2）

丸数字は「日本史B」との共通問題

	問題番号	問題数	前年比
難しい問題	15	1	-1
やや難しい問題	2、3、4、5、⑬、14、⑳、㉑、㉒、29、30、33	11	-3
標準的な問題	1、9、⑪、16、17、18、⑲、㉓、㉔、㉕、27、28、32、34	13	-3
やや易しい問題	6、7、8、⑫、㉖、㉗、㉘、31	8	+6
易しい問題	⑩	1	+1
難易度指数（難しい順に5～1の指数を与え、平均値を算出）		3.09	-0.38

（委員の合議により、教科書で扱われているかという観点のほか、教育現場における授業の実態、受験者の実態を考慮し、問題ごとの難易度を5段階に分類した。）

(3) 難易度については（表2）、昨年度の難易度指数3.47が今年度は3.09となり、易化したと分析できる。設問ごとの難易度を昨年度と比較してみると、今年度は「難しい問題」が1題、「やや難しい問題」が3題、「標準的な問題」が3題それぞれ減少した。一方、「やや易しい問題」が6題、「易しい問題」が1題増加した。全体的に難易度が下降し、全体の平均点が上昇したと考えられる。また、「日本史B」との共通問題12題の内訳は、「やや難しい問題」が3題、「標準的な問題」が4題、「やや易しい問題」が4題、「易しい問題」が1題であり、昨年度要望した「日本史B」との共通問題の易化に配慮いただけたと評価したい。

本試験の項目別・分野別出題範囲 (表 3)

○は 2 点問題、□は 3 点問題

区 分		政 治	外 交	社 会 経 済	文 化	史料・グラフ 地図・図版等	問題数 (配点)
歴史と生活	衣食住の変化						0 題 (0 点)
	交通・通信の変化	①				2 3	3 題 (8 点)
	現代に残る風習と 民間信仰						0 題 (0 点)
	産業技術の発達と 生活						0 題 (0 点)
	地域社会の変化						0 題 (0 点)
19 世紀の 近代日本の 形成と世界	国際環境の変化と 幕藩体制の動揺	6	5				2 題 (6 点)
	明治維新と近代 国家の形成	7 9		10 12	17 14	4 8	8 題 (24 点)
	国際関係の推移と 近代産業の成立		11 18		16	13	4 題 (12 点)
国際関係 近代日本の 歩みと	政党政治の展開と 大衆文化の形成			19		15	2 題 (5 点)
	近代産業の発展と 国民生活						0 題 (0 点)
	両大戦をめぐる 国際情勢と日本	20	22 28 30	21 23	31 29		9 題 (27 点)
第二次世界大戦後の 日本と世界	戦後政治の動向 と国際社会	34		33	32 26	24	5 題 (15 点)
	経済の発展と 国民生活			25			1 題 (3 点)
	現代の日本と 世界						0 題 (0 点)
問題数 (配点)		6 題 (17 点)	8 題 (24 点)	10 題 (29 点)	4 題 (12 点)	6 題 (18 点)	34 題 (100 点)
平成 25 年度		10 題 (29 点)	4 題 (11 点)	11 題 (33 点)	4 題 (12 点)	5 題 (15 点)	34 題 (100 点)
平成 24 年度		13 題 (38 点)	3 題 (9 点)	6 題 (17 点)	4 題 (12 点)	8 題 (24 点)	34 題 (100 点)

(項目別区分中の「歴史と生活」については、分野別範囲のみを示している。)

(4) 出題範囲を分野別にみると(表3)、「外交」の設問が4題(11点)から8題(24点)へ増加し、「政治」の設問が10題(29点)から6題(17点)へ減少した。それ以外は大きな変化はなかった。学習指導要領の「世界史的視野に立ち我が国を取り巻く国際環境などに関連付けて考察させる」という目標を十分達成した出題といえる。また、今年度も「史料・グラフ・地図・図版等」を用いた出題が6題(18点)あり、多角的な手法で歴史的思考力を問う設問が多かった。項目別にみると、19世紀初めから1970年代までと学習指導要領の範囲内で出題され、概ねどの項目からもバランス良く出題されており、適切な出題であったといえる。全体的に項目別・分野別に横断した多面的な理解を問う設問が多く出題されている。

3 試験問題の内容・表現・程度

第1問 「日本史A」の主題学習である「交通・通信の変化」をテーマとした問題

明治期から現代におけるメディアの変遷について、大学生2人の会話文を素材にした問題。問1は二つ以上の語句を組合せる標準的な問題。アは自由民権運動に関わる基本的事項である。リード文に「明治の初めに板垣退助たちが政府に提出した」の表記があり、正答が得られたと思われる。イは石川達三の著書『生きてゐる兵隊』の用語はやや難しい。リード文に「日中戦争勃発以後」の表記から推測できる配慮があることやプロレタリア文学の代表作である小林多喜二の『蟹工船』との選択から消去法で正答できる。問2は荒畑寒村の自叙伝をもとに、二つ以上の文章の正誤を判断するやや難しい問題。史料は人物が把握できるように注を付し、受験者が読解できる配慮がある。幸徳秋水と堺利彦らの万朝報の退社についてはやや難しいが、史料に「明治36(1903)年」等の年号やキーワードが配置されている。Xには日露戦争との関係を示唆する表記があり、受験者が推測できる工夫がある。またYもリード文の初等教育の普及について読解できれば解答が得られる。リード文や史料の読解力に加え、歴史的事象も把握できていないと正答が得られないため歴史的思考力を問う良問と評価したい。問3は各新聞記事の史料を古いものから順に配列するやや難しい問題。年代順配列問題は年号や年代観を正確に把握していないと解けないため受験者にとってはやや苦手分野といえる。各新聞記事における文字の表記に着目すると正答が得られる歴史的思考力を試す良問である。文字以外の情報からも何らかの推測ができ得るような多角的な視点があるとより有意義な問題となった。また写真が若干不鮮明である点がやや残念である。

第2問 近世後期から明治初期の「政治」、「社会」をテーマとした問題

Aはイギリス人ロバート＝フォーチュンの『幕末日本探訪記』の史料を読み解く問題。問1は史料の空欄に人物と語句を組合せるやや難しい問題。アは史料の「鳴滝」から「シーボルト」を選択できるが、イは「防備する砦」に注目し正答が得られるような配慮があるものの「鎮台」と「台場」の違いがやや難しい。しかし史料読解を伴う問題は、歴史的思考力を確認する良問であるため、今後も出題をお願いしたい。問2は近世後期から幕末の対外関係に関する古いものから順に配列するやや難しい問題。I～IIIは時代の幅があり適切であるが、「ビッドル」の扱いが教育現場ではやや弱く感じられる。国名等の表記を入れるなどして若干難易度を緩和する必要がある。問3は二つ以上の文章の正誤を判断するやや易しい問題。Xは「阿部正弘」と天保期の水野忠邦の政策とを入れ替え、各政策の基本的事項を確認している。Yも明

治維新の基本的事項を確認する問題である。

Bは徳川慶喜の人物史に関するリード文を読み解く問題。問4はリード文の空欄に人物と語句を選択するやや易しい組合せ問題。Aは文中の「水戸藩主」から人物が特定される。イも慶喜が大政奉還を上表したことが判別できる。いずれも基本的事項を確認する問題である。問5は各説明文XYの該当する日本地図上の位置を選択するやや易しい組合せ問題。昨年度の東南アジアの地図を活用した問題では、教育現場における地図活用能力を養成する授業展開の必要性について言及した（『平成25年度試験問題評価委員会報告書』）。今年度は日本地図での問題設定となり、比較的把握し易かったものとする。空間的な歴史的思考力を試す良問であることを今年度も評価したい。高等学校の教育現場では、地図を積極的に活用した授業での重要性について指摘しておきたい。問6は明治政府の政策について正しい文章を選択する標準的な問題。各選択肢の内容を正確に読み取る基本的な問題である。

第3問 明治期の租税制度をテーマとした、「外交」、「社会・経済」を問う、「日本史B」第5問との共通問題

問1はリード文の空欄に語句と人物を選択する易しい組合せ問題。Aはリード文の「地租改正」や「交付を受けた土地所有者」の表記から正答は明らかである。イは明治十四年の政変後の大蔵卿を確認する基本的な問題である。問2は条約改正問題について各XYの文章より合致する人物名を選択する標準的な組合せ問題。いずれの人物も識別できる基本的な問題である。小村寿太郎が選択肢にないことから正答が確定できた問題設定である。問3は地租改正の内容について確認する二つ以上の文章を選択するやや易しい組合せ問題。各選択肢は改正点の具体的な内容であり、基本的事項である。問4は「1875～1915年度の主要租税収入」の推移が示された表をもとに、二つ以上の文章の正誤を判断するやや難しい問題。表から各年度の各租税収入の比率が推移する特徴と各年度の歴史的事象を多角的に判断させ、単に知識のみを問うのではなく、歴史的思考力を試す良問と評価する。Xの正誤については「日露戦争後」の表記から、受験者が正確に把握しておきたい年代観である。またYの関税自主権の完全回復も日露戦争後であることと関税の比率が1900年段階で10%を超えていることを表から読み解けば正答が得られる。

第4問 明治期の宗教と社会をテーマとした問題

Aは明治期における政府のキリスト教に対する宗教政策に関するリード文を読み解く問題。問1はリード文の空欄に人物と地名を選択するやや難しい組合せ問題。Aの人物の識別はリード文の「日本初の和英辞典を作ったアメリカ人宣教師」と表記があっても受験者にとってはやや難しい問題である。現場での扱いもやや弱いのではないかと推測される。イの選択では「信徒たちを捕らえ改宗を強要」の表記が識別を補足しているが、空欄の前にある「長崎」がかえって判断を混乱させた点もあわせて指摘しておきたい。問2は明治期の教育や医療・衛生に関して正しい文章を選択する難しい問題。他の選択肢の誤りが正確に把握できていれば消去法により正答が得られるが、コレラの流行に関する内容はかなり細かい点にまで言及されており、受験者にとっては難しい問題であったと推測できる。問3は明治期の社会・言論・文芸について、誤った文章を選択する標準的な問題。設問形式を誤文選択にすることで、選択肢の判別が適切に行えたものとみられる。

Bは明治期における仏教に関する宗教政策のリード文を読み解く問題。問4はリード文の空欄に当てはまる語句を選択する標準的な組合せ問題。ウの政策はリード文の政府の宗教に関する方針を確認する問題である。エの政教社は、リード文に「1880年代後半以後」と年代を示し、「国粹（国粹保存）主義的な言論の高まり」と丁寧な表記があり、明六社との年代観を明確に区分している。作問に際しては、リード文に年代やキーワードとなる語句が配置されており、正答に導く配慮があることを評価したい。問5は日清・日露両戦争の前後における日本の外交に関する古いものから順に配列する標準的な問題。Ⅰ～Ⅲの時期の幅は広く取られており、各歴史事象の転機と各条約の意義を適確に捉えていることを確認する良問である。

第5問 手塚治虫の人物史をテーマに大正期から戦後の「政治」、「社会・経済」、「文化」を問う、「日本史B」第6問との共通問題

Aは手塚治虫の幼少期のリード文をもとに、大正期から昭和初期の「政治」、「社会・経済」、「文化」について確認する問題。問1は都市における大衆文化の特徴と地方における社会不安について、各XYの文章の正誤の組合せを判断する標準的な問題。Xは大衆文化の特徴を確認する事項である。Yも農村の状況を把握する基本的な事項である。リード文にも具体的な年代が示されており、問題内容も推測できる配慮がみられる。問2は昭和初期における内閣の政策と普通選挙制度について、基本的事項を確認する標準的な組合せ問題。選択肢の内容も基本的な事項であり、正確に把握していれば正答が得られる。問3は第一次世界大戦後の日本経済について正しい文章を選択するやや難しい問題。震災恐慌、金融恐慌、昭和恐慌はこの時期の社会・経済を理解するための重要な歴史事象である。受験者にとってはやや苦手な分野からの出題であり、事象の流れを正確に理解していないとやや難しい問題になったことと推察する。選択肢には他の分野か年代からの問題を設定すると難易度が緩和されたと思われる。

Bは手塚治虫の中学時代のリード文や『紙の砦』による漫画史料を素材に、満州事変以後の軍需産業と経済や太平洋戦争の戦局について確認する問題。問4は太平洋戦争の戦局について古いものから順に配列する標準的な問題。Ⅰの「カイロ宣言」、Ⅱの「ミッドウェー海戦」の年号が均衡しているが、海戦における戦局が示されていて、正答できるような配慮がある。問5は満州事変以後の軍需産業と経済について、誤文を選択するやや難しい問題。③の「日本労働組合総評議会」は戦後の時代観との識別をし易いものとしたことや誤文選択の設問形式としたため、受験者に正答が導ける配慮がある。

Cは手塚治虫の敗戦後のリード文を素材に、戦後の「政治」、「社会・経済」を確認する基本的な問題。問6は手塚治虫『ぼくはマンガ家』の史料の空欄に二つの語句を選択するやや易しい組合せ問題。アは「天皇みずから」、イには「軍国主義者」の各表記があり、正答が導けるような配慮がある。設問内容は基本的な事項を問うものである。問7は高度経済成長期の経済と社会に関する誤文を選択するやや易しい問題。④の内容はこの時期の押さえておきたい基本的な事項である。誤文選択の設問形式により正答を導き易くしている。問8は戦後の科学技術と社会問題について正しい文章を選択するやや易しい問題。各選択肢の内容が判断し易く、基本的な事項を確認する良問である。

第6問 1920年代以降の政治・外交をテーマとした問題

Aは1920年代後半から1930年代のリード文をもとに、「政治」、「外交」、「社会・経済」を読

み解く問題。問1は人物と事件の組合せを選択する標準的な問題。アはリード文に「憲政会および立憲民政党内閣で外相となった」、イは「政党内閣は終わりを告げた」と判別できる表記があり、正答を導く配慮がある。なお、前年度の選択肢にも「五・一五事件」があり、年度毎の出題に留意する必要がある。問2は各軍縮条約の内容の正誤を組合せる標準的な問題。各条約内容の意義や歴史事象を正確に把握していることを確認する基本的な問題である。問3は1930年代の思想・言論統制について正しい文章を選択するやや難しい問題。消去法により正答は得られるが、社会および文化に関する内容であることや「日本文学報国会」などの表記はやや難しい。選択肢を他分野からの出題としたり、時代を1930年代以前の内容とするなどの配慮があると良かった。

Bは1930年代後半から戦後のリード文をもとに、「外交」、「社会・経済」を読み解く問題。問4は日中戦争から対英米開戦までの日本の対外政策について、古いものから順に配列するやや難しい問題。Ⅱの「日ソ中立条約」、Ⅲの「三国同盟（三国軍事同盟）」との年号は均衡しており、判断がやや難しい。もう少し年代の幅を持たせた設定かリード文に推測できる文言を配置するなどの配慮が欲しい。問5はアジア太平洋戦争（太平洋戦争）期の国民生活について正しい文章を選択するやや易しい組合せ問題。各選択肢の内容は基本的事項であり適切である。問6は占領期の社会・文化について正しい文章を選択する標準的な問題。選択肢の内容も基本的事項である。

CはGHQの占領政策の転換から1970年代の「政治」、「外交」について述べたリード文を読み解く問題。問7はサンフランシスコ講和会議について、二つ以上の文章の正誤を判断するやや難しい問題。Xは基本的事項であるが、Yの「小笠原諸島の返還」がやや細かい表記となり難しい内容となっている。問8は1950年代から1970年代にかけての政治・外交について誤文を選択する標準的な問題。選択肢の条約内容や政治については基本的事項である。

4 要 約

前文で述べた(1)～(4)の視点についての意見・要望を記すことにする。

- (1) 今年度の「日本史A」は、「標準的な問題」や「やや易しい問題」は全体の半分を占め、教科書や授業実態に即した基礎・基本的事項を重視した問題設定であった。やや細かい内容を選択肢に扱う点もみられたが、リード文に年代やキーワードが適切に配置されていた。単に知識のみを問う設問ではなく総合的に歴史的思考力を多角的に考察させる問題が全般的に多かったことは、大いに評価できる。このことは、『平成25年度試験問題評価委員会報告書』に指摘された内容を検討し、作問に当たられた問題作成部会の御努力の賜物と評価したい。出題範囲については、19世紀から1970年代までであり適切であった。今後も作問に際しては、高等学校学習指導要領に準拠した作成をお願いしたい。
- (2) 「世界史的視野に立った理解」という観点からは、「外交」分野からの出題が8題24点（昨年度は4題11点）あり、多く取り入れた内容であった。日本を取り巻く国際的な環境や動向を意識する問題設定が多くあり、国内の動向と関わる総合的な理解を試そうとする狙いが随所にみられたことを評価したい。また今回の「史料・グラフ・地図・図版等」に関する設問は、史料の読解力や活用能力の育成を意図し、空間的な思考力を多面的に捉えさせようとする作問の狙いが明

確な良問であると評価したい。今後も、「史料・グラフ・地図・図版等」に関する設問については、内容の精選や出題方法などのあり方を検討され、問題作成に当たっていただきたい。

- (3) 全般的に、複数の項目別区分や各分野にまたがって幅広く思考・判断を問う問題が多かったことは評価したい。バランスよく項目別に出題され、分野別の出題においても教育現場の指導を踏まえた内容であった。
- (4) 出題方法や表現については、「古いものから（年代）順に配列」の設問が昨年度より3題増加して5題（15点）であった。「日本史B」との共通問題の難易度を緩和するなどの対応が改善されていた点は評価したい。またリード文を読解すると正答が得られる工夫やキーワードとなる語句が適切に配置されており、判別できる工夫が随所に確認された。センター試験が教育現場に与える影響は大きいため、来年度も引き続き良問の出題をお願いしたい。出題数は昨年度と同様34題で、60分の試験問題としては適切であった。なお、本年度のセンター試験が教育現場における指導のあり方や今後の授業実践に有効的に生かされることを期待したい。

日本史B

1 前 文

平成26年度大学入試センター試験（以下「センター試験」という。）における「日本史B」の平均点は66.32点で、昨年度より4.19点上昇した。平均点は65点を上回っており、「世界史B」との平均点較差は2.06点、「地理B」とのそれは3.36点であり、試験の公平性は保たれていると評価できる。今年度の「日本史B」の試験は、昨年度にも増して基礎・基本的な事項の定着と、理解力・歴史的思考力を問う良問として高く評価できる。この結果の主な要因について、次のように分析した。

- ① 要求されていた知識は、概ね高等学校の授業で学習する基礎・基本的な事項であり、各時代の特徴及び歴史的事象の推移・変化、あるいは背景を理解していれば正答を導くことができる適切な構成であったこと。ただし、細かな歴史的事項や高度な知識を要求する設問も若干みられた。
- ② 設問形式では、分野別のバランスはとれている。一見難しそうにみえても、リード文や設問文の中に正答を導くための配慮がなされていたこと。
- ③ 資料の取扱いでは、高等学校の多くの教科書に掲載されているものが使用されていたこと。また、受験者にとってはおそらく初見であると思われる資料も取り上げられていたが、リード文を参考にして判断できるよう配慮されていたこと。

このように、高等学校「日本史B」の学習成果を評価する課題として、①の基礎・基本的な事項をもとに、時代の特徴及び歴史的事象の推移・変化や背景を問う問題や、②の設問形式と学習内容の程度のバランスや配慮、③の資料の取扱いについて、今後も作問のあり方に継続して反映していただくことを強く希望したい。

今年度のセンター試験問題の検討評価に当たっては、次の4項目を中心に行った。

- (1) 高等学校学習指導要領（以下、「学習指導要領」という）に準拠し、教科書の内容や授業実態に即した出題であったか。
 - (2) 時代別・分野別の出題バランスは適切であったか。また、基本的な知識の理解や歴史的思考力を評価するのにふさわしい問題であったか。
 - (3) 「細かな事象や高度な事項・事柄」に深入りすることなく、60分の試験時間にふさわしい出題内容、難易度であったか。
 - (4) 設問形式、表現、図表や写真の取り扱いに配慮した適切な出題であったか。
- (注) 文中で具体的に取り上げる際は、解答番号で表記した。

例 15 = 解答番号15の設問

2 内 容・範 囲

今年度の試験は、理解力や歴史的思考力を問う姿勢を継承するとともに、歴史的事象の背景や事象の背景や本質を問う、高等学校学習指導要領の目標に即しての出題であった。しかしながら、出題傾向、内容の取扱いや出題形式、難易度について検討していただきたい点もある。（「 」内は学習指導要領からの引用語句である）

(1) 出題傾向

出題傾向について、時代別及び分野別の視点からそれぞれ概観すると次のようなことがいえる。

時代別では、昨年度よりバランスのよい出題となった。〔7〕は、縄文時代の遺跡についての出題であるが、縄文以前の時代に関する問いは過去4年間出題されていなかった。原始は「日本史B」を学習する生徒の多くが最初に取り組みの単元であり、出題するように配慮を求めてきたところ、それを反映していただいたことに感謝している。現代史の設問の出題は、過去3年間さかのぼって3～4問で、今年度も3問となった。範囲も高度経済成長までの時代を中心としており、偏りなく出題されたことは高く評価できる。

分野別では、今年度も、昨年度同様に縦方向だけでなく横方向の矢印も多くみられる。(表1参照)。全体として、各時代の特色と時代を超えた大きな流れの両方をとらえる出題となった。第1問は、歴史資料(文献資料)をテーマとした出題であり、「ア歴史と資料」「ア資料をよむ」について追究させる設問であった。〔1〕、〔2〕はリード文の導きとともに、写真のキャプションも併せて資料を理解した上で正答にたどり着く出題となっており、良問であると評価できる。

また、今年度も昨年度同様に出题者の強いメッセージ性を感じる出題がみられた。第6問は、リード文で手塚治虫の作品を素材として、アジア太平洋戦争と戦後の社会を見る眼として、自然や人間性という尺度を持つことの意味を取り上げている。戦後の科学技術の発達と社会問題のかかわりについての設問であり、歴史学習の締めくくりにあたる部分でもある。「日本史B」の「民主的で平和的な国家・社会を形成する」資質を養うという目的について再認識を促すものとして受け止めたい。

(2) 「歴史の考察」を意識した出題

今年度の出題で特徴的な点は、「ア歴史と資料」及び「イ歴史の追究」の双方にまたがって考察させる問いが出題されたことである。前述した〔1〕、〔2〕のほかに〔8〕では、史料の文脈を理解した上で、邪馬台国の時代を「東アジア世界の動向と関連づけて」とらえさせた。また、〔10〕は、大伴家持の和歌から出挙を導き出すという工夫に満ちた出題であった。〔19〕は、橋南谿の『西遊記 補遺』からの出題であり、地理的視点をふまえて「歴史上の人物の果たした役割や生き方などとかかわらせてとらえ」た良問として評価できる。さらに第6問は、手塚治虫の作品を通して、氏が生きてきた時代をたどりながら出題された。〔36〕の設問では、戦後の時代を特色づける歴史的事象を用いて、現代の社会を構成している要素を問う良問であった。

(3) 理解力・歴史的思考力を重視する姿勢

〔2〕は、写真で足利直義裁許状の花押に着目させ、リード文を合わせ読むことで正答にたどり着くように構成された設問であった。丁寧に筋道を立てて考えさせることを念頭に置いた良問であると高く評価できる。〔15〕は、渡来銭を取り上げて「東アジア世界の動きと関連付け、世界史的視野に立って理解させることを重視」する視点にたつて、幅広い時期にまたがる経済状況についての理解に基づき思考力を求めた設問として評価できる。〔18〕は、図2の柳生徳政碑文を取り上げた設問である。受験者にとってよく知られた資料であるが、あらためて資料の語句を吟味することの重要性を再認識させる設問であった。内容面においても中世社会の特徴の一つである「庶民の台頭に着目」して、「時代の社会的特色を考察させる」という目標に切迫する良問であった。

時代別・分野別出題傾向（表1）

表中の白抜き数字は各2点、それ以外は各3点

区 分		政 治	外 交	社 会 経 済 交 通	文 化 思 想 宗 教	資 料 図 絵 地 図	出題数・配点 ()内は25年度 []内は24年度
原始・古代	先土器時代						7題 20点 (8題 23点) [7題 20点]
	縄文時代			7			
	弥生時代		8				
	古墳時代	9					
	飛鳥～白鳳時代						
	奈良時代	11			10	1	
中世	前期 平安時代	12					8題 22点 (6題 17点) [6題 18点]
	院政時代	13	15				
	鎌倉時代 前期	3			14		
	後期 南北朝時代					2	
近世	前期 室町時代					18	7題 19点 (8題 21点) [9題 23点]
	後期				17		
	織豊政権時代						
近代	江戸時代 前期					19	11題 30点 (11題 31点) [10題 28点]
	後期		24	20 22	23 21	4	
	明治時代 前期	25	26				
	後期	27				28	
現代	大正時代			31			3題 9点 (3題 8点) [4題 11点]
	昭和時代 前期	30		29	33		
	大戦期	5		32		6	
現代	戦後～占領期	34					3題 9点 (3題 8点) [4題 11点]
	高度経済成長期	35		36			
	～現代						
26年度出題数・配点		11題31点	4題12点	8題23点	7題20点	6題1点	36題 100点
25年度出題数・配点		8題22点	8題22点	5題13点	8題24点	7題19点	(36題 100点)
24年度出題数・配点		9題25点	4題12点	8題21点	6題15点	9題27点	[36題 100点]

(4) 内容の取扱い

今回の出題においても、歴史的事項の本質や背景への理解に基づき思考力を測る意欲的な設問が多くみられ、大いに評価できる。第1問で、そのことが顕著にみられる。設問は、リード文や資料のキャプションを直接用いて正答への糸口を見出す構成となっている。これは、歴史的思考力を測ることにつながり、今後さらにこうした問題が出題されることを期待している。

今回、地図を用いた設問が2問出題された。7では、三内丸山遺跡と大森貝塚の地図上の位

置、**25**では、日米和親条約の開港場の箱館とモリソン号砲撃の場所を特定する問題であった。地図については、歴史学習のためのツールとして位置付ける段階から一歩進めて、時間軸に加えるもう一つのスケールとしての空間軸を用いて、複眼的に国家や社会を探る総合的な考察に迫る問題として工夫・発展させていく必要があるのではないかと考える。

3 分量・程度

問題数は、大問が6題、小問が36問であった。60分の試験時間を考慮すると、大問、小問の数は適切であるといえる。ページ数は32ページであった（昨年度31ページ、一昨年度27ページ）。各小問で提示される選択肢や組み合わせ問題の文章等、解答にかかわる文章が2行にわたるものは28文であり、43文と特に多かった昨年度を別として、例年並みに落ち着いた（一昨年度25文）。また、文章の正誤を選択する形式は11問であったが、選択肢の文章が全て2行にわたるものは2問であり（昨年度3問、一昨年度0問）、昨年度と比べて問題に関する情報量は、やや減少したとみることができる。

試験問題の程度に関しては、昨年度と比較すると「細かな事象や高度な事項・事柄」に関する理解を必要とする設問が減り、「基本的な事項・事柄」を問う出題が増加した。昨年度、特許制度という稀有な主題であった第5問が、社会経済史の主要な分野の一つである租税制度を扱ったのは、その好例である。また、**16**では題目と御文、および安土城と大坂城の差異が、**25**においては地券の内容と松方正義の業績が問われており、いずれも基礎・基本的事項の理解の程度を測る良問であった。加えて、**5**のひめゆり隊および女子挺身隊は一昨年度、**26**の日英通商航海条約は昨年度も出題された基礎・基本的用語であり、受験者にとって判断が容易であったといえる。

一方で、やや高度な事項と思われる箇所も見受けられた。**33**では、日本労働組合総評議会の結成およびその時期が問われたが、精緻で確実な知識が必要であったといえ、他の選択肢を消去することで正解を得ようとした受験者も多かったと思われる。

4 表現・形式

(1) 設問形式

設問形式を分類すると表2のようになる。昨年度は、関連事項の組み合わせを選択する形式は2問であり、そのどちらも文章と地図の組み合わせを選ぶものであった。それに対し、今年度は関連事項の組み合わせを選択する形式は4問と倍増し、その内訳も文章と地図の組み合わせを選択する形式が2問、文章と人名の組み合わせを選択する形式が1問、文章と人名・語句の組み合わせを選択する形式が1問と、多岐にわたるものとなった。これは、史実を「多面的・多角的に考察」するに資するものといえ、こうした複合的な設問の出題を今後も継続していただきたい。また、文章の正誤を選択する形式は11問と依然多く（昨年度13問、一昨年度14問）、人名や歴史用語の単なる暗記に止まることなく、正確な知識を基に事象の流れや背景をとらえる、歴史的思考力を試そうとする姿勢がみられる。なお、6択形式の年代配列問題は、今年度は5問であった（昨年度3問、一昨年度4問）。**3**は、村方三役、地頭請所、半済令を手がかりに、それぞれ江戸、鎌倉、室町の各時代を導き出す設問であり、事象の変遷を俯瞰してとらえるものとして評価できる。

一方で、文章の正誤の組み合わせを選択する形式である[11]は、多くの教科書には七道が官道であると記載されていないために、2文ともに誤りと判断した受験者がいたと推測される。こうした出題については、一考を俟ちたい。

設問形式（表2）

表中の白抜き数字は各2点、それ以外は各3点

設問形式		平成26年度		平成25年度
		問題数	問題番号	問題数
事項（人名・単語）を選択する形式		0		0
文章の正誤を選択する形式		11	2 、 5 、 6 、 8 、 13 、 17 、 20 、 31 、 33 、 35 、 36	13
二つ以上 文章の組 み合わせ	空欄を補充する形式	5	10 、 16 、 19 、 25 、 34	7
	文章の正誤の組み合わせを選択する形式	6	4 、 11 、 18 、 22 、 28 、 29	6
	年代配列を選択する形式	5	3 、 9 、 15 、 21 、 32	3
	正しい文章の組み合わせを選択する形式	5	1 、 12 、 14 、 27 、 30	5
	関連事項の組み合わせを選択する形式	4	7 、 23 、 24 、 26	2
		36		36

(2) 表 現

全体的には受験者にとって読みやすいリード文や選択肢となっている。第6問の手塚の生誕年、および中学校入学年は、正答に至る鍵であり、受験者の見落としを防ぐ手立てとして明確に文頭に示されていた。同時に、リード文を丁寧に読むことの大切さを再認識させるものであり、是非今後も継続していただきたい。また、[18]では、Y文の『ヲキメ』の説明として『莊園領主に対する年貢の未納分』に『など』という語が補われ、幅広い解釈に対応する配慮がみられた。こうした傾向についても、高く評価するところである。

一方で、[28]のX文について、受験者の正確な問題文の読解のためには『地租』の後に『の比率』という語が付加されていれば望ましい。掲げられた表の地租の項目には金額と比率の両欄があるため、誤解を防ぐ手立てとなると考える。

(3) 図表や写真等の扱い

史料・写真・絵図・地図・表・グラフは17点（13箇所）であり、昨年度の10点（9箇所）より増加した。資史料等を活用した設問が多いことは、「資料をよむ」「資料にふれる」に即しており、出題に適した資史料の取捨選択を行う問題作成部会の矜持と労力に敬意を表したい。

[7]、[24]では、歴史的事象を「国際環境や地理的条件と関連付け」て思考する力が求められた。また、第1問の写真資料1～3は、「文化遺産を取り上げ、祖先が地域社会の向上と文化の創造や発展に努力したことを具体的に理解させ」る上で効果的であった。同様に写真資料4は、第6問のBの資料とともに、「戦争を防止し、民主的で平和な国際社会を実現する」人物を育成するという科目の目標に沿った設問であったと評価できる。

一方で、グラフ・表を資料とした[6]、[28]は、形式は相互に異なったものの、正答に至るにはいずれも各事象の正確な年代暗記が大きな鍵となる設問であった。「歴史的思考力を培う」「資料の活用」を図るためにも年代だけではなく、表・グラフの動きを読み取った上で事象の原因・背景・推移を考察させるような設問を求めたい。

5 要 約

(1) 高等学校の授業への影響

昨年度に引き続き資史料・図版などを利用した出題が、本年度も全体の4分の1を数えた。受験者にとって身近な漫画資料も含め、「多様な資料を用いて多面的・多角的に考察」させる方針が堅持されている。受験者の考察を促す良質な資史料を十分な精査の上で掲げていただいている。高等学校現場では、様々な資史料の活用を通し、歴史的な見方や考え方を身につけさせるために、歴史的背景や本質を理解させることの重要性を改めて痛感した次第である。

また、我が国の戦争の歴史および国際平和や、科学技術の発達と社会問題の課題に関する内容が多く取り上げられており、「国際社会に主体的に生きる日本人としての資質を養う」という科目の目的について再認識することとなった。

(2) 意見・提案等

今年度の本試験は、評価の高かった昨年度の問題以上に、バランスのよい出題であった。時代縦断的・横断的な理解を求めるとともに、地域的な差異や国際的な情勢をふまえて考察する力が試されており、学習指導要領に沿った内容であった。

縄文以前の時代に関する問いは、過去4年間出題されていなかったため、出題していただくよう配慮を求めてきたところ、それを反映していただいたことに深く感謝している。また、従来より現代史に出題が偏らないこともお願いしてきたが、今年度も設問数は3問となっており、範囲も高度経済成長までの時代を中心とした出題で、偏りなく出題されたことは高く評価できる。

高等学校現場として、教科書によって取り扱いに差のある内容や、消去法で正答を導き出すことになる設問については、再検討をお願いしたい。

リード文を含め設問全体がひとつの学習過程を示しており、その流れに即して正答にたどり着く問題構成は、歴史的思考力を問うことにつながる良問であると高く評価できる。読みやすく、歴史の本質や背景、さらにはアーカイブズや記録史料の重要性を喚起し、公文書管理法が施行された現代社会の実情をも反映させた優れたリード文を作成されている。このような問題作成部会の姿勢に敬意を表するとともに、今後とも、この努力の継続を希望する次第である。